

はじめに

現在、郷土史ブームであるが、今回三重県の伊勢地方と伊賀地方のそれぞれの地方からむらのモノグラフを紹介させていただき、むらの人々から見た農村の様子を、都会の人々に少しでも知っていただければ幸いである。

今日、村落研究者の多くが都会生まれで、都会育ちであることを考えると、生粋のむら人である筆者は、むらの現場を都会の人々に少しでも知ってほしいという想いを持っている。なぜなら、現在四十代の筆者自身、これまでの人生をむらで生まれ、むらで育ち、むらで生きる者として、むらとともに歩んできたからである。

そのことから、今回紹介する伊賀地方の伊賀市予野集落と伊勢地方に位置する現代の多気郡多気町車川集落のむらの人達の行動には共感できるとともに、このような元気なむらの人達がいるのかと改めて感心した。またむらの人達の結束の固さにも改めて感心した。

そして、そのむらの人達の元気の素は、都市住民との交流なしには考えられない。こうした時代だからこそ、外部に開かれたむらは貴重な存在だと考える。このように外部に開かれたむらではあるが、この二つのむらでは、むらの中核となる公園を持っている。

もし現在この公園がなければ、都市住民との交流にまでは発展していなかったであろう。その意味では、公園ができる背景となったこの二つのむらが抱えている歴史には、そのむらしか存在

しない歴史の独自性があるものと思われる。

さて、全国的にむらとしての共有意識が弱まっている中、この二つのむらでは、共有の信仰意識が保たれている。また、この二つのむらには、水源事情が悪く、水で苦悩した歴史をもっているむらと、水源が豊かで栄えたむらという、歴史的背景に大きな違いが存在する。

そのため本書では、この二つのむらのモノグラフを描いていくにあたり、伊賀市予野集落については二〇〇四（平成十六）年から、多気郡多気町車川集落については二〇一〇（平成二十二）年から、現地での聞き取り調査を実施すると同時に、参与観察や資料の収集に務めてきた。

I 現代のむらの位置づけ―過去から未来に向けて

今日、農村では農業の兼業化が進み、異質性が発達し、集団組織は多面化した諸個人の関心に従って、多様な集団に組み込まれていると考えられている。

だが、一九七〇年代までの村落研究では、第一に、農業経営の単位および村落社会は、固有の地域に定住することを前提としていた。第二に、家・村理論においては、生産力の発展がみられないことが、理論構築の前提となっていたのに対し、農民層分解論においては、生産力の発展が前提とされていた。第三に、村落を一つの完結した集団とみなしていた。これらの点が、一九七〇年代までの村落研究の規範的枠組みの特色であったが、一九八〇年代以降の日本村落では、こうした一般的な分析枠組みが、現実を記述・分析する装置ではなくなったと指摘されている〔熊谷二〇〇四〕。

農村は、もはや閉鎖的な村落ではなく、全体社会の変動の局地化された諸影響を受けて、ダイナミックに変容しつつある社会であると捉えられている〔池田一九九一〕。

そして現在の農山村は、他の地域の人々との交流なしには成り立たない時代にきている。そのため、様々な形の交流人口の仕組みづくりが考えられている。農山村の集落は変容しており、現在のままのむらを残すことが困難になってきており、空き家対策や、観光化対策などむらの生き残りにかけて模索が続いている。

要するに、一九九〇年代以降、農山村地域の集落の機能としては、従来から重視されてきた食料生産機能だけでなく、環境保全や休養などの多面的機能が提起されるようになってきたのである。このような考え方は、一九六〇年代〜一九七〇年代には希薄であり、集落はあくまで農業生産の空間であり、その管理維持の権利と責任は集落内の農家が担っていた。さらに二〇〇〇年代に入ると、集落再生の観点から、農山村が固有に有する価値観に都市住民が共鳴ないし共感する可能性についても論じられてきた「吉野二〇〇九」。

秋津元輝氏は、「集落の再生にむけて―村落研究からの提案」と題して、これからの再生論の方向性を提示している。〈楽〉の原理は「^①「市民社会論」型の再生イメージとしてのみならず、「ポピュリズム」型の再生イメージも含めた集落のエートスであり^②、ときに都市住民の手を借りながら、農村生活を楽しむというこの〈楽〉の原理に基づくエートスの浸透が、二十一世紀の集落再生の鍵になることを提案している「秋津二〇〇九」。

こうした中で、今日農山村の再生においてむらだが、地域資源を発掘し、維持していくために、企業などの外部の人的資源と連携する場合、外部のやり方を、一方的にむらに押しつけられ、摩擦が起こってくるのが目に見えている。そうしたことから、外部の人的資源と連携する場合には、地域住民が経験的に培った部分を取り入れていく必要性があるのではないだろうか。また農村の高齢者にとって、健康に役立つ農作業、生きがいとしての農作業は、農業生産を六次産業^③として考えるむらの方向性や、グリーンツーリズム^④に特化したむらの方向性とは少し違うのではないだろうか。いわゆる農業生産組織の六次産業化の動きや、グリーンツーリズムの動きを見ても、いろいろな事業に手を出せば出すほど、女性や若者の手を借りなければ、つまり多数の人員を動員しなければ、組織運営が立ち行かなくなることが目に見えている。

結城登美雄氏が指摘しているように、地域資源を単なる特産品や地場産品開発のための材料とみなし、市場的対応のあまりに性急な商品化を求めてしまうと、資源に内在している多様な価値や活用の可能性を削ぎ落してしまうことになる「結城二〇〇九」。

例えば地域の公共財、地域が保有する文化資源などが人々のネットワークを図る場になることも十分考えられる。つまり、むらの人々にとって社会参加の意識を高める装置としての文化資源の役割は大切だと考えられる。またむらの人の健康は、土地との結びつきにも影響されるし、住み慣れた土地への愛着によっても変わってくるのではないだろうか。

現在、農業生産に特化したむらや、観光に特化したむらがある中で、むらとして、元気な地域と元気でない地域の違い、つまり、むらとして元気がでる素は何かを考えていかなければならない時代に直面している。

これまで農村の研究者にとって、〈共同体〉ということばは、通常は対象を分析するための概念と理解されてきた。これに関し本書では、内山節氏の『共同体の基礎理論』を参考にしておきたい。内山氏は、かつて大塚久雄氏が解体すべき対象ととらえた共同体を、前近代の象徴としてではなく、むしろ未来への可能性として捉えている。なぜなら、共同体はその「かたち」に本質